

東京電機大学 情報環境学部

数学科教育法 第 15 回

§4) なぜ数学を学ぶのか, 教えるのか

平成 23 年 9 月 14 日 (水)

担当：佐藤 弘康

「数学教育の目的」を考える

生徒

「なぜ数学を学ぶのか」 ← 学ぶ目的（目標）



教師

「なぜ数学を教えるのか」 ← 教える目的（目標）

数学教育の目的（目標）

- 数学教育の必要性
- カリキュラム開発の方針
- 指導目標, 到達目標, 取り扱う題材など（指導・評価の方針）

数学教育はなぜ存在するのか

有用性

「数学教育は役に立つから」

人間性

「何かに役立つからではなく、そうする行為（数学の学習をすること、数学的思考をすること）自体が人間の本性（楽しみ）である」

「数学教育の有用性」を考える

(1) 数学教育は何に役立つか？

- 実用性
- 陶冶性
- 文化性

(2) 数学教育の有用性をどのくらいのスタンスでみているか？

- 個人レベル
- 社会レベル
- 人類歴史レベル

(3) 数学教育の有用性をどのような人を対象に考えているか？

- エリートのため
- 大衆のため

(1-1) 数学教育の「実用性」

何に対しての実用？

- 「日常生活」
- 「社会・経済の発展」
- 「科学技術の発展」

初等数学教育の根本的考察（佐藤良一, 1924）

「自然及び社会を数学的に考察する能力を養い、数学的知識獲得の方法を会得させること」



自然界および社会を正しく理解するための道具（数学の道具性）

(1-2) 数学教育の「陶冶性」

陶冶性 人間の性質が教育によって変えられる可能性、教育可能性。

- 人間形成
- 民主社会における有能な市民の育成
- 知的能力の発展「論理的思考」「抽象的思考」「創造的思考」「記号的思考」

島田茂 (1952)

- 人間が物事を合理的に正確に考え、これを他人にはっきりと誤解のないように知らせていく上に欠くことのできない道具
- できるだけ肉体的精神的疲労を少なくして最大の能率をあげていくときの重要な手段

(1-2) 数学教育の「陶冶性」

「数学通信」第16巻第2号巻頭言（根上生也氏）

数学を学ぶことに伴って涵養される合理的な精神を有した人格を，私は「数学的人格」と呼んでいる；

- 先入観を持たずにいつも真実を理解しようとする。
- 何か新しいものを生み出そうとする。
- そのために，自由な議論をする。

(1-2) 数学教育の「陶冶性」

宇野勝博・菅原邦雄 著「きらめく数学」（プレアデス出版）

次に述べるような力を養うことこそ数学を学ぶ目的である。

- これまで見てきたものや現在眼の前にあるものを鋭く見抜く力（観察力）
- これがこの先どうなっていくのかについて思う力（想像力）
- うまく事を運ぶために何が必要か見出す力（創造力）
- ひとつひとつ着実に考えを組み立てる力（論理力，構成力）

(1-3) 数学教育の「文化性」

- 長い歴史を経て発展してきた数学文化を享受する。
- 社会における数学文化の適切な位置づけを確立し、それを継承・発展させるため。

数学のもつ自由性・美しさ・開放性

- 数学は「算術（代数）」と「測量（幾何）」から始まったが、現代数学が扱う範囲はとてつもなく広がっている（同時にその適用範囲も）。
- 「論理的思考」「抽象的思考」「創造的思考」「記号的思考」のよさを感じ得ることで得られる情意的側面。
- 数学の命題は一度正しいことが証明されれば、それは未来永劫正しい命題として残る。そして、その正しさは誰もが確かめることができる。

(2) 数学教育の有用性を

どのくらいのスタンスでみているか

- 個人レベル
 - 日常生活のため
 - 受験のため (?)
 - 特殊な技術を習得するため
- 社会レベル
 - 経済発展
 - 社会発展
- 人類歴史レベル
 - 科学技術発展
 - 数学という文化の発展

(2) 数学教育の有用性を

どのような人を対象に考えているか

- エリートのため
 - 科学者
 - 技術者
 - 数学者
 - その他特殊な職業
- 大衆のため
 - 民主主義社会における有能な市民の育成

数学教育はなぜ存在するのか（再考）

有用性 （主に 数学教育学者 が主張）

「数学教育は役に立つから」

文化性 （主に 数学者 が主張）

「自由でファンタスティック！」

人間性

「何かに役立つからではなく、そうする行為（数学の学習をすること、数学的思考をすること）自体が人間の本性（楽しみ）である」

「規範」としての数学

【参考文献】「数学でつまづくのはなぜか」小島寛之（経済学者）著，（講談社現代新書）。

「規範」としての数学

(「数学でつまづくのはなぜか」 小島寛之 著)

「数学は役に立つ」という考えに対して

- 「役に立つものなら認めてやろう」
- 「役に立つものしか用がない」

という考えが生まれる。

規範とは

「社会や集団において個人が同調することを期待されている行動や判断の基準」

「規範」としての数学

(「数学でつまづくのはなぜか」小島寛之 著)

(例)

- ある教員のテストは「いかに数学の能力があるか」を試すものではなく、「いかに教員の教えに従順か」を調べるものだった。
- ある生徒は、自分で一から考えないと気が済まない質で、授業のときもテストのときも、公式を使うのを拒否し、自分ですべてを導出しようとする。
- そのため、教員には自分の話を聞かず我流にこだわる反抗的な生徒とみなされ、テストでも十分な時間で解くことができず、ひどい点数しかとれなかった。

このような規範，は「数学の内部」においては，大きな意味を持っているとはいえない。「教育上の都合」「大人の都合」でしかない。

「規範」としての数学

(「数学でつまづくのはなぜか」 小島寛之 著)

ボウルズ-ギンタス (米) の研究結果

学校教育の中での語学や数学の成績は、「創造性」「積極性」「独立心」などとは負の相関を持ち、「我慢強い」「堅実」「学校への帰属意識が強い」「如才ない」などの性質と正の相関を持つ。

「規範としての数学」の背後の「合理性」

- 「我慢強い」「堅実」「学校への帰属意識が強い」「如才ない」という性向は、企業が雇用したい従業員の性向として最も好ましい。
- したがって、「社会人養成機関」である学校に、企業のそのような要求が反映されることは理にかなっている。
- 逆に言うと、数学者や数学教育者の発言は 何の合理性も持っていない。

「規範」としての数学

(「数学でつまづくのはなぜか」 小島寛之 著)

役に立つから学ぶのではない。

尊厳のある人間の一人として生まれてきた当然の権利として学ぶのである。